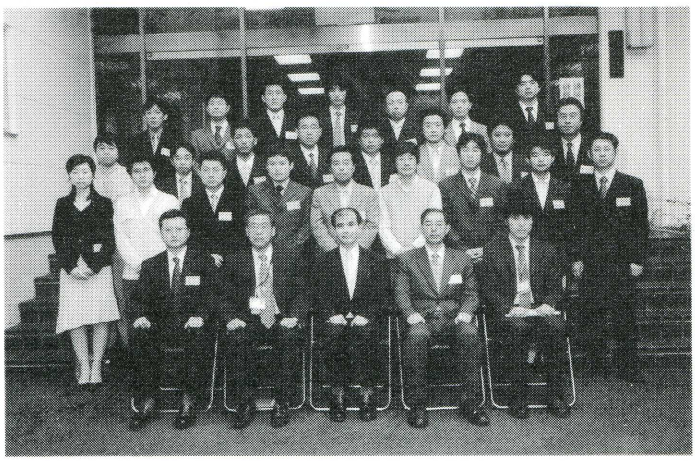
＜研修レポート＞

街なか再生実務研修を受講して

常陸太田市役所　建設部
都市計画課　高星　雅幸

私は、今回茨城県都市計画協会の平成18年度市町村職員都市計画関係研修の推薦により、11月6日から10日までの５日間東京都小平市の全国建設研修会館において街なか再生実務研修を受講してきました。この研修は行政・民間の両者を対象として（財）全国建設研修センターが主催して行っている研修で街なか再生の考え方、街なか再生計画策定演習等により街なか再生実務に関する幅広い知識の習得を図ることを目的に開催され、平成18年度は関東甲信越から九州地方までの各県から27人の受講参加がありました。



参加者27名

主な研修内容としては街なか再生に関する事、中心市街地に関する事、まちづくり三法の見直しに関する事、地域活性化に関する事などでした。なかでも、とても印象に残った講師が３人いました。

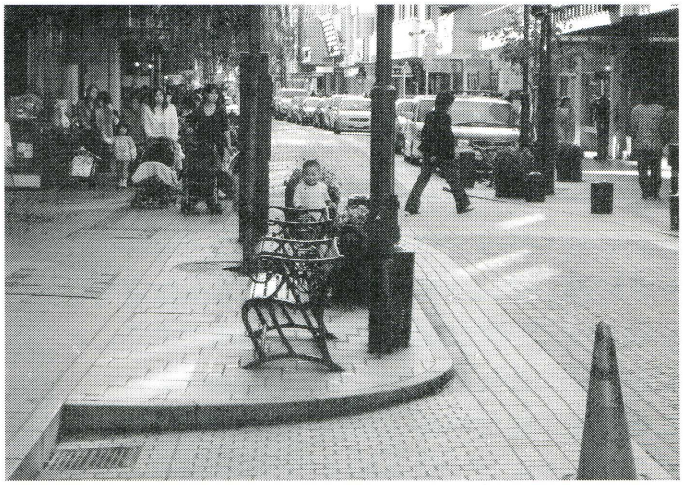
１人目は中心市街地活性化ということで日本政策投資銀行　地域企画部　参事役の藻谷浩介講師です。藻谷講師は、なぜ小売販売額・モノ消費は伸びないのかという事で皆さんは長期不況による「デフレ」が原因だ。デフレさえ克服すれば小売販売額は回復する。と思っていませんか実はそうではなく、96年をピークに退職者が新卒就業者を上回ったために消費者の所得が落ち始めた事や地域の所得が増えないのに店を増やしすぎたために過当競争で値崩れが起きている事、また市街地の解体で高度な消費を誘発できる空間が失われ所得がますます消費に回らないことが原因であると解説していました。
またその他生きている中心市街地の共通点として「住む人」と「来る人」の共生（雑踏の中で、人々が場と時間を共有）・「器」の上への「変転」ある「雑居」（まちという器のうえに、諸機能・諸事業・諸人が、入れ替わりつつ雑居）・文化・気風・ブランド（統制者不在にもかかわらず、競争と自由の中から醸成される、そのまち独自の文化・気風そして魅力）である。とも講義を受けました。

横浜みなとみらい21現地研修

２人目は地域活性化とまちづくりということで東京大学　アジア生物資源環境センター　教授の堀繁講師です。堀講師は、「地域活性化」とは、来訪者が増えてお金が地域に落ちることをいい、「まちづくり」とは、来訪者が増えること・お金が地域に落

ちるようにすることであり、そのためには来訪者が増えるようにすることが不可欠である。

来訪者増のためのまちづくりとして、「見てみたい」と思わせる景観をつくること（既存の建物や施設、さらには山などの自然を見せる景観をつくる）、「歩いてみたい」と思わせる路づくり（楽しく歩ける道、人を優先した道）、「行ってみたい」と思わせる休憩スペースづくり（歩くと休むはセットであり休憩スペース）、「楽しい」と思わせる沿道の建物づくり（道を歩いて見るものは沿道の建物であり、中間領域とそこへの設置物）が重要である。



横浜元町地区　休憩スペース

お金が落ちるためのまちづくりとしては、良い店に見せる店の前（中間領域、３種の神器、透過性、さくら、入隅・出隅）、買う気を起こさせる店の中（間接照明、スポット照明、行灯照明、木の多用、分節、もてなしの設えの見込角、サービス）、買おうと思う商品（クオリティ、価格、品揃え）があげられる。以上の事が大切ですということでした。また、堀講師には３日目に現地研修ということで横浜市内の散策を行いまちづくりの良い点、悪い点などいろいろな話が聞けました。

３人目は、長野商工会議所　株式会社まちづくり長野　タウンマネージャーの服部年明講師です。服部講師は中心市街地の更なる活性化ということで、ＴＭＯが事業主体となった長野市の中心市街地の活性化の紹介がありました。このＴＭＯは「㈱まちづくり長野」という会社であり資本金8,000万円（商工会議所2,600万円、長野市500万円、民間企業等4,900万円）を出資して出来ました。このＴＭＯが動けば民間が動くということで、行政主導ではなく民間が主導でまちづくりが出来るという事でした。また、服部講師は、まちづくりは自分の住んでいる地区のために行うのだから自分たちで資金を出してまちづくりを行うことが一番であり、その資金が足りないのであればその時に市や県から補助をもらえばよいと講義を行っていました。

ワークショップ演習の様子

私は、この研修を受講してとても色々なまちの紹介や事例など貴重な意見を聞く事が出来とても勉強になりました。是非自分の仕事にもこの講義で得たものを生かせれば良いと思っています。

最後に皆さんも研修に参加する機会があれば参加してみてはいかがでしょうか。